

知床世界自然遺産地域科学委員会地元報告会

「科学の目を見た世界自然遺産・知床」
～ 知床の今～



斜里町 平成 21 年 7 月 23 日 (木) 斜里町立知床博物館 18:30~20:00

主催 知床世界自然遺産地域科学委員会 (科学委員会事務局: 環境省・林野庁・北海道)

協力 斜里町・羅臼町

プログラム

主旨説明 18:30～18:40

大泰司 紀之（知床世界自然遺産地域科学委員会委員長）

最近の科学委員会の議論 18:40～18:50

知床世界自然遺産地域科学委員会事務局

講演 18:50～19:40

エゾシカの増加とそれに伴う植生への影響

梶 光一（エゾシカワーキンググループ座長）

質疑 19:40～19:50

閉会挨拶 19:50～20:00

出江 俊夫（科学委員会事務局長・環境省釧路自然環境事務所長）

講演

エゾシカの増加とそれに伴う植生への影響

梶 光一（エゾシカワーキンググループ座長）

知床世界自然遺産地域とその隣接地域を対象とした知床半島エゾシカ保護管理計画は、「原則として自然の推移に委ねることを基本とするが、希少植物種、または遺産地域に特徴的な在来植物と植物群落の消失の回避を含む生物多様性の保全を前提」とし、「エゾシカの高密度状態によって発生する世界自然遺産地域の生態系への過度な影響を軽減すること」を目的としている。そのため、知床岬では、予防原則の立場から平成 19 年 11 月より密度操作実験が開始されている。一方、世界遺産センターと IUCN による現地調査が平成 20 年 2 月に行われ、その調査報告書では、「勧告 10：遺産地域内の自然植生に対するエゾシカによる食害が、許容可能なものか許容できないものかの限界点を明らかにすることが出来るような明確な指標を開発すべきである。」、「勧告 11：知床半島エゾシカ管理計画と関連する実行計画の実施を継続すべきであるが、抑制措置が、遺産地域のエゾシカの個体群、生物多様性、生態系に及ぼす影響を注意深く観察すべきである。」と、予防原則に理解を示しつつも個体数調整には抑制的な勧告を出し、個体数調整が必要か否かを見極める指標の設定が必要となった。そこで、生息数の増加にともなって生じるシカ個体群と植生の一連の状態の変化を追跡することによって、シカの過増加を示す指標の検討を行った。植生ではシカの低中密度においても、生息密度の上昇にともない枝葉の利用可能量の減少、樹高成長阻害、幹折りを伴う摂食、林床植物の減少、採食ラインの形成などの一連の変化が認められた。ササに影響が出始めたのは高密度とな

ってからであり、矮小化、葉量減少、被度減少が生じ、幹高が生息密度の上昇に対して敏感であった。一方、ササやイネ科草本では密度捜査実験にも敏感に反応して、被度と高さが回復している。以上のようにシカの生息密度上昇に伴うシカ個体群ならびに植生の一連の状態の変化を過増加の程度を示す指標として用いることが可能であるが、かつてみられた大型草本や希少植物の復活までは相当低密度とする必要があるが、低密度に至る植生回復プロセスは不明である。そのため、今後も植物群落調査を継続しながら指標化を検討していく必要がある。

梶 光一（かじ こういち）東京農工大学大学院共生科学技術研究院 教授
北海道大学大学院農学研究科修了（農学博士）

15年間の北海道環境科学研究センター勤務を経て、2006年より現職。野生動物保護管理の分野が専門で、30年間にわたりエゾシカの調査を行っている。知床では知床岬のシカ大発生のメカニズムについて研究している。20年以上前には馬に乗って知床とチベットでシカ調査を行っていた。

著書：編著には、『エゾシカの保全と管理』（北海道大学出版会）、編著『世界自然遺産 知床とイエローストーン 野生をめぐる二つの国立公園の物語』（知床財団）などがある。